富山で育つ宿根草の組み合わせとデザイン
～ 44　ツボミギボウシ ～

職藝学院
教授　渡 邉 美 保 子

ツボミギボウシは、朝鮮半島原産のクサスギカズラ科の宿根草です。花茎の高さは100cmほどで、７月下旬から８月中旬に鮮やかな青紫色のつぼみをふくらませます。名前のとおり、花は開かずつぼみのまま落ちてゆきます。長さ５cmほどの花が花茎の片側に互い違いに下向きに並びます。葉は長さ15cm幅７cmほど、小ぶりなので花壇の手前に植栽することができます（写真 １ ）。

写真１　ツボミギボウシ。8月初旬。見ごろは、7月下旬から8月初旬頃。100cmほどの花茎につぼみをつけて下から順にふくらんでゆく。後ろは、セキヤノアキチョウジ。右はクサキョウチクトウ。青紫色の花を引き立ててくれる。

ツボミギボウシの新芽は、３月下旬ごろ地面から出てきます。濃茶色に染まった丸い木の芽のような新芽は、地面の色によく似ています。この美しい芽だしの瞬間を見逃さないように、この時期は毎朝花壇に通います。４月中旬になると、茶色の着物を身にまとったような姿になります（写真 ２ ）。ぴかぴか光る黄緑色の葉は、くるくると上手に丸められているのが分かります。まるでタケノコのようです。１ケ月ほどかけて、丸められている葉を少しずつゆるめて一枚ずつ葉を広げてゆきます。重ならないように上手に放射状に広げます。まんべんなく光をもらうためです。７月になると、アスパラガスのような花茎が、葉を押しのけて伸びます（写真 ３ ）。葉の高さが30cmほどになっているので、葉をかき分けて見ないとわかりません。緑色のつぼみをつけた花茎は１日に３～４cmも伸びてどんどん長くなります。７月中旬には緑色の蕾が下から順に紫色に染まり始め、全体の花が下向きになる７月下旬から８月初旬に見ごろを迎えます（写真 ４ ）。

ツボミギボウシの一つの花は色づいてから10日ほどでしおれて、自然に落ちてゆきます。枯れた花を自ら落としてくれるのでお手入れは不要です。落ちた花を分解すると、雄しべと雌しべが折りたたまれて入っています。運がよければつぼみから雄しべと雌しべが突き出ている花を見ることができます（写真 ５ ）。

植え付ける場所は花壇の東側をおすすめします。午前中の光が十分当たり午後からの西日が当たらないところが良いでしょう。ツボミギボウシの西側に草丈が高くなるセキヤノアキチョウジやクサキョウチクトウなどを組み合わせますと西日が当たりにくくなり土の乾きを防いでくれます。

写真２　4月中旬。新芽一つ一つが広がって葉になる。毎年少しずつ株が大きくなる。

写真３　7月初旬。花茎が伸び始める。先端にたくさんのつぼみを付ける。

写真４　8月初旬。ツボミギボウシの花。この形が最もふくらんだ状態。

写真５　8月中旬。花茎の先端の花の中から雌しべと雄しべが突き出ている。